

R18

ADULT ONLY

成人向け



生き疲れ社畜と

異世界メイド

著：相山タツヤ

絵：懐良匠

異世界転移恋愛奇譚シリーズ発売中作品紹介

現実社会は辛い事ばかりだから、異世界の少女と幸せになろう。



ヒロイン：
エイリス

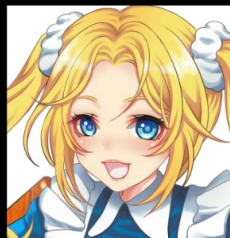
「ブラック社畜と赤ずきん」

クーデレ少女に尽くされたい。

主人公の部屋に突然現れた赤ずきんの少女エイリスとの交流と愛情を描く第一作。ブラック企業勤めで毎日が辛い主人公が、クーデレ気味に尽くしてくれるエイリスとの交流と献身的なHによって、徐々に強い自我を取り戻していく物語が見所です。



睡眠姦/布団で初H/夜の電車でH
お風呂で貪欲フェラ/甘々ご奉仕H



ヒロイン：
メリル

「ゆるふわメイドと機関銃」

ゆるふわ天然メイドに癒されたい。

夜道で拾った異世界メイドとの交流を描くドタバタラブコメディ風の第二作。異世界でクビになったロリ巨乳メイドが、主人公の為に何とか役に立とうと大奮闘。人それぞれで良いじゃないとお互い慰め合いラブラブエッチに過ごすふんわり物語。



無邪気に手コキ/ご奉仕フェラ
ラブラブ初H/朝だけど二回戦



ヒロイン：
エイカ

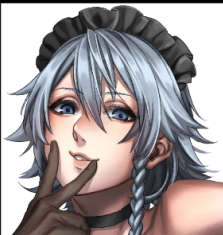
「その淫魔は雨と共に」

エロいメンヘラと共依存したい。

雨が降りしきる夜の公園で出会った、妖しい黒ずきん少女との危険な愛欲を描く第三作。童貞で孤独な主人公がメンヘラ淫魔少女と流されるままに性交し、それから彼女なしでは生きられないと強い愛着を抱いていく共依存溺愛ダークラブストーリー。純愛です。



雨濡れ騎乗位で童貞喪失/甘々授乳手コキ
貪欲肉食エッチ/お尻で初エッチ



ヒロイン:
ローヤ

「吸血メイドのご奉仕生活」

高雅な吸血鬼メイドと夜通しHしたい。
夜道で助けた美女は異世界のメイドで吸血鬼
でしたという第四作。

出会いの場面が済んでからは、ひたすら攻守
交代しつつ夜通しセックスしっぱなしのエロ
さ大濃縮作品になっています。オススメ。

初めての吸精フェラ/ラブラブ中出し初H
♡ パイズリご奉仕/騎乗位攻H/反撃種付プレス
気絶するまで絡み合い/朝勃ち性処理セックス



ヒロイン:
シュノリュース

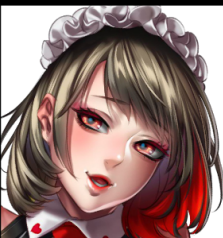
「蜘蛛女の楽園」

青肌人外蜘蛛女とおねショタしたい。
異世界に飛ばされたショタ少年と、青肌蜘蛛
お姉さんとの恋愛模様を描く異色の第五作。

主人公とヒロイン以外は敵だらけ、多くの
苦難が立ちはだかる中で、異種族ながらも
強く想い合う二人の純情ラブストーリー。

でも、エッチはものすごく肉食系。

♡ キスしながら優しく手コキ/
あまあま授乳手コキ/搾精孕ませ交尾



ヒロイン:
アヤカ

「生き疲れ社畜と異世界メイド」

Hなメイドに毎日甘やかされたい。
生き疲れた社畜童貞主人公がひたすら異世界
メイドに重めの愛で甘やかされる第六作。

突然始まる甘々メイドライフ、そして徐々に
明るみになる重い愛に溺れていく純愛作品。
Hシーンもたっぷり特濃です(当社比)

♡ ご奉仕中出しH/夜通し種付けH/おはようフェラ
帰宅後速攻で発情H/バックで激しくケモノH
汗だくお尻で騎乗位H/あまあまパイズリ

目次

第一章『メイドが現れた夜』・・・5

第二章『メイドと迎える朝』・・・53

第三章『メイドと過ごす夜』・・・78

第四章『メイドがいる日々』・・・107



第一章『メイドが現れた夜』

「もう嫌だ……辞めたい……」

間もなく夜中の十二時に差し掛かろうという時間帯、ひと気のない暗い住宅街を俺はフラフラと歩いてた。

右手には鞆、左手にはストロング缶チューハイ。歩きながら飲酒なんて見苦しい行いだと自覚してはいるが、こうでもしないと今の俺には精神的な逃げ場がない。

「何で俺ばっかりこんな目に……おかしいだろ、クソ」

誰も居ないのをいいことに愚痴を吐き捨てながら、チューハイをグビりと飲む。

俺とはあるアパレル販売会社の社員で、今年で勤めて四年目になる。肩書上は正社員といっても、給与はアルバイトと大して変わらない最低賃金ギリギリ。勤続年数が長くなっても給与は上がらず、仕事の責任だけが重くなり続けている。

今日も、体育会系気質で頭でっかちな上司たちと、やる気が無いのに権利の主張だけは一丁前な後輩たちの間で板挟みになり、あらゆる方向から打ちのめされる一日を送ることになった。

こんな毎日が死ぬまで永久に繰り返されるのかと思うと、発狂して死にそうになる。

「……ちくしょう！」

自棄になって、空になったチューハイの缶を思いっきり蹴り飛ばした。しかし思った以上に大きい金属音が鳴り響いてしまい、すぐに近くの一軒家の窓がガラガラと開

いて、そこから老人が怒り顔を覗かせた。

「オイ！ うるせーぞこの野郎！ 静かにしろ！」

「……あ、はい……すみません……」

俺は苛立ちを押し殺しながら、平謝りして缶を拾い上げる。

「近所迷惑だ！ こっちは寝るところだ、ボケが！」

そう言って老人は窓をピシャリと閉めた。

近所迷惑な声を上げてるのはどっちだと思いつつ、俺は行き場のないストレスを胸に抱え続ける。

「……はあ」

俺は大きな溜息をついて、空き缶を通りすがりの自販機横のゴミ箱に捨てた。

どうしてこうも人生が上手く行かないのだろうか。勉強も人並みには頑張ってきたはずなのに。

あれこれ思い返して考えてみるが、やはり最大の原因は、最初の会社選びを誤ってしまった事だと思いがたってしまう。

最初の会社が酷いブラック企業で俺は精神を病んで辞め、次に勤めた会社は少しはマシだったが人間関係が上手くいかず閑職に追いやられて再び辞めざるを得なくなった。いま俺が勤めている会社は、三社目だ。

三度目の就職活動は困難を極めたことは、今でも苦渋の記憶としてよく脳に焼き付いている。二度も会社を辞めた人間は、相手に問題物件として見られるに充分だ。書類選考による門前払いを何度も何度も繰り返す大連敗の末、ようやく今の会社の採用を獲得できたという経緯がある。

だから現状にいくら不満があっても、次に辞めた時に再びチャンスがあるとはどうしても思えず、結局この辛い日々を黙って耐え忍ぶ他にないという状態に陥っているのだ。

「死んじまったほうが、楽かもな……」

つい、そんな考えまでよぎってしまった。この時間でも車道に出ればトラックは走っているだろうから、今からでもそこに飛び出せば一発で昇天できるだろう。

「……クソッ」

愚かな思考を無理やり振り払う。生きる為の仕事によって命を奪われるなんて馬鹿らしい事は、まっぴら御免だ。

なるべく余計な事を考えないように無心で歩き続けていると、俺の住んでいるマン

シヨンが見えてきた。

「あれ……？」

俺が住んでいるのは二階の部屋だが、その窓から部屋の照明が灯っているのが見えた。

今日は朝起きてすぐに部屋を出たはずだから、点けてもいない照明の消し忘れなどそもそも有り得ないはずだが。

「なんで……？ え……？」

原因を考えれば考えるほど記憶があやふやな感覚になってくる。意識しない日常的な行動なんていちいち記憶していないから、絶対に照明を点けていないかと自問すると正直なところ自信がない。

俺は首を捻りながらも、あまり熟考せずにマンションの玄関をくぐった。そして階段を上がり、廊下を歩いて、自分の部屋のドアの前に立つ。

……ひょっとして、泥棒？

鍵を取り出したところで、ようやく俺はその可能性に思い至った。

俺の部屋に金目のものなどほとんど無いが、泥棒にとってはそんなの知った事でない。最悪、今まさに俺の部屋を物色している真っ最中という可能性すらある。

俺は独り暮らしだから、第三者が部屋に居る事など絶対に起こりえない。もしこれが漫画の世界だったら、付き合ってる彼女が勝手に上がり込んできたなんて甘ったるい展開が起こることがあるかもしれないが、実際の現実世界の俺は、そもそも今まで一度も異性と付き合ったことはないし、童貞を未だに貫き続けている体たらくだ。

……どうしよう。

泥棒に鉢合わせしても、力づくで取り押さえられるような筋力は無い。勇ましく挑んでも返り討ちに遭うのがオチだ。

しばらく悶え悩み抜いた末、俺は結局、泥棒という可能性を綺麗さっぱり頭から捨て去ることを選んだ。

泥棒なんか俺を狙うはずがない。そう思い込むことにした。

正常性バイアスの悪例そのものだが、ただでさえ仕事でヘトヘトな状況なのに、無法者と戦う想像なんてしたくもない。

俺は鍵を開け、ドアノブを捻った。

「ただいまー」

普段は言う相手もないので言わないが、泥棒が潜伏している危険性をほんのわず

かに考えて、あえて大声で帰宅を宣言した。

すると、全く予想だにしないことが起こった。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

そんな声が聞こえて、廊下の奥から真っ赤な服を着た女性がトタトタと歩いてきた。

「ひゃあああああ！」

幽霊を見たと思った俺は情けなく絶叫し、ドアを強く閉じる。

何だ、今のは。幽霊が自室にいる可能性なんて誰が想定するものか。

正体不明のものをみてしまいドアノブを握りながらビクビクしていると、内側からドアが開いて強く押され始める。

「わっ……うわぁあぁ……!!」

俺は狼狽えながら必死にそれを抑え込む。

「大丈夫ですよ、安心してください。私は危害を与えるものじゃありませんから」

そう優しい女性の声が聞こえてくるが、その力は驚くほど強く、ドアを止めていた俺はズルズルと押しやられていく。

「ひっ……いや、意味が分からない……!! 誰だよ……!! 何なんだ……!!」

俺は恐怖ですっかり戦慄しながら、恐々とドアを盾代わりにして玄関を改めて覗き込む。

そこに立っていたのは、妙に浮世離れた煽情的な赤いメイド服を着た、黒髪ショートカットの若い女性。頭にはヘッドドレスを着けており、首には赤いネクタイを締めているが、彼女の着ているビスチェは胸元が大きく開かれており、豊かに膨らんだ胸の谷間が惜しげもなくさらけ出されている。

「私は、アヤカと申します。お見知りおきを、ご主人様」

そう言って彼女は、その場でうやうやしく頭を下げた。

よく観察すると、彼女の艶のある髪の毛先が、光の加減で赤っぽく見える時がある。どんな染め方をすればこのような不思議な髪色になるのか想像もつかない。

頭を上げ、ほとんど瞬きせずに俺を見つめる彼女の瞳は、透き通った朱色。カラーコンタクトを入れているのであろうが、異様に妖しげな光を含んでいる気がして、しばし魅入られたように彼女を見つめ返してしまう。

「……そんなに熱心に見つめて下さって、嬉しいです。私のこと、お気に召したようですよ」

そう言ってアヤカは、赤い小さな唇を緩めてクスクスと笑う。

本当に何なんだ。何もかもが異常な状況だ。

部屋を間違えたのかと思ったが、表札は合っているし、俺の鍵でドアが開いたのだからここは間違いなく俺の部屋だ。

思考が大渋滞を起こしてひたすら立ち尽くしていると、アヤカは俺を招くように手を部屋の奥へ向けた。

「さあ……ご主人様、お疲れですよね？　早く、お上がりになってください。簡単なものですが、お食事を用意してますよ」

飲酒のせいで俺の脳がバグを起こしているのかとすら思ってしまう。
とにかくここは俺の家なので、混乱しながらも玄関を上がる。

「私について聞きたい事が沢山おありだと思えます。それについては、お食事をしながら、ゆっくりとお話ししますね」

彼女は、まるでこの部屋に居るのが当然という落ち着き払った振る舞いをしていた。
そのせいで、不審者だ警察だと叫びたてる気持ちが全く湧いてこず、逆に彼女のペー
スに吞まれてしまう。

独り暮らしだと開き直って散らかり放題だったはずの俺の部屋は、引越してきた
初日と同じくらい綺麗に掃除され整理整頓されていた。床やベッドに放り出っばな
しだったエロ漫画も本棚にしっかりとアイウエオ順に整理され、洗うのが面倒くさく
て洗面所に放置したままだったはずのオナホールすら綺麗に洗浄されて棚に鎮座して
いる。

テーブルに視線をずらすと、そこには肉じゃがと味噌汁とご飯が置かれている。肉じゃがが好きな俺が毎週作っているメニューそのものだ。いよいよ恐ろしくなってくる。

呆然としている間に俺の鞆は壁に掛けられ、スーツも丁寧に脱がされてしまった。初対面のはずなのに、アヤカはすっかり愛妻同然の振舞いをしてくる。

「ご主人様……今日もお疲れ様でした。さあ、ご主人様の大好きな肉じゃが、冷めないうちにお食べになってくださいな」

自宅なのに他人の家に上がってしまったような居心地の悪さを感じながら、アヤカに導かれるままに席に着く。

彼女は真向かいに座って、俺の顔をおっとりした笑顔で見つめた。

「初めてなので、味付けがご主人様のお口に合うかどうか分かりませんが……気に
なったことがあったら、何でも申しつけてくださいね？ 次はそれに合わせて作りま
すから」

俺は自分の頬をギュッとつねった。しっかりと痛い。

「夢ではありませんよ……？ 私は、ご主人様だけのメイドです。ご主人様の命令な
ら、どんな事でも忠実に仰せつかります……」

俺は自分の目のあたりを執拗に触る。VRゴーグルを被せられているわけでもない。

食事と睨めっこしていると腹がグウと鳴り始めたので、俺はひとまず箸を掴み、目
の前にある肉じゃがのじゃがいもをつまんで、ゆっくりと口に入れた。

「どうですか、ご主人様……？」

美味すぎる。自分で作ったものよりも遥か上を行く美味さだ。塩気と甘みの絶妙なバランスが俺の舌にとって百点満点で、じゃがいもの熱の通り方も最適でホロホロと口の中で心地よく崩れる。

続いて肉を口に入れると、こちらもしっかりと味が染み込んでいて柔らかく美味しい。冷蔵庫にあったのはスーパーで買った普通の肉だが、いつも自分が作っているものと同じだとは到底思えないクオリティだ。

全てが俺の理想にマッチしている。最高に美味しい。

俺は物言わず、食事をガツガツと進める。食べる手が止まらない。

「お口に合いましたか……？ 嬉しいです」

まるでずっと昔から連れ添ってきた妻のような眼差しで俺を見つめてくる。

俺は用意された食事を綺麗さっぱり食べ尽くしてから、恐る恐る尋ねた。

「……君と俺は、何処かで会ったことがある？」

あまりにも俺の生活に浸透してきているので、彼女を単なる不法侵入者と断じて良
いのか自信がなくなってくる。

ひょっとして彼女は俺に片思いをしていた学生時代のクラスメイトで、今になって
何らかの恩返しに来たのではないかと、都合の良いストーリーを構築してみる。

「さあ……どうでしょうね？ それについては、ご主人様の記憶が全てです。ご主人様
が初対面だと認識しているのなら、そういうことでも差し支えありません」

妙に回りくどい返答をされ、俺は少し困ってしまう。

可能な限り記憶を掘り起こしてみるが、こんな誰もが振り返るような美人と接した
経験など微塵も無い。

「じゃあ……ひとまず初対面ってことで話を進めるが……君は、何者だ？　どうして俺の部屋に居て、どうして俺を『ご主人様』と呼ぶんだ」

「それは、私がそうしたいと願ったからです。私は、貴方のメイドになるために、ここに来たんです」

斜め上の返事が返ってきて、俺は頭を抱える。さて、どうしたものか。

「えーっと……どうして、俺のメイドになりたいと思ったの？　なんで、俺？」

「私にとって、ご主人様が全てだったからなのですよ。ご主人様以外のメイドなんて、有り得ません」

俺は再び頭を抱えた。言葉は通じるが、思考のチャンネルが丸つきり噛み合っていないような感じだ。

これだけ質問をしているのに、合理的な説明が返って来る気配が無い。

「なら……君は、何処から来た？」

「遙か遠くの世界。いわゆる、『異世界』から来ました」

俺は三度目の頭を抱えた。これ以上彼女とコミュニケーションを取れる自信が無い。

「……まあ、もういいや。それで……いつ帰る予定なの？」

「ずっと、ご主人様にお仕えいたします」

「え？ 『ずっと』って、どのくらい……？」

「ずっと、です」

アヤカは微笑みながらそんな事を言う。

「ちよ、ちょっと待って。まさか……俺の家に、ずっと泊まり込みでいるってこと……？」

「はい。……お気に召しませんか？」

彼女がずいっと顔を近づけてきて、俺はどきりとする。

「気に召すも何も……突然すぎない？　そもそも男の狭い独り暮らし部屋だし……」

「私は、ご主人様と共に過ごせればそれで幸せですよ？　狭くても構いません。もしご主人様が一人きりにしてほしい時があったら、その時は姿を消しますから」

「そういう問題じゃなくてな……うーん……何て言ったらいいのか」

自分でも、アヤカをどのように受け入れるべきなのか思考が判然としない。

不審者として問答無用で警察に突き出すような気は起こらないが、こんな急に共同生活を迫られても困ってしまう。

正直なところ、こんな美女との一つ屋根の生活には憧れていたという感情はある。

辛い会社から帰っても孤独で、二次元の画像を見ながら自分を慰める日々には、限界を感じていたところだった。自慰の後の虚しさが日に日に強くなるばかりで、本物の人肌が恋しくなることが多くなつた。けれども、過去のトラウマから人付き合いが怖くて、今さら恋人を作ろうと努力してみたり、風俗嬢相手に童貞を捨てようなんて勇気は無かつた。

アヤカの正体や目的は分からない謎だらけの状態だが、こんな待遇は悪いどころか、むしろほとんど理想に近い。

こんな都合の良い話、常識的に考えれば騙されているという予感がするが、こんな

美女が俺のメイドとして付き従う生活を送れるなら、後で法外な額の請求書が届く羽目になっても後悔は多分しない。

問題なのは、アヤカと実際どのような今後付き合っていくかだ。

女性と交際経験が皆無の俺が、どうやって共同生活を送れるものなのか。

「心配しないでください、ご主人様……。私は、ご主人様の命令に、何でも従いますから」

俺の不安を悟ったアヤカは、そう言って色っぽい上目遣いで俺を見つめた。髪をかき上げた二の腕のせいで、彼女の大きな胸がたゆんと揺れた。ビスチェの下にはブラジャーなど着けておらず、胸の先には乳首の尖りが浮き出ている。

今さら彼女の胸元を強く意識してしまい、俺は慌てて目を逸らす。

「……とっ、とにかく！ お、俺は、もう寝ようと思うよ」

椅子から立ち上がって、彼女に背を向ける形でベッドの方を見る。

「俺は適当に床で寝るから……アヤカはベッドを使って良いよ。とにかく、そういうことで！」

アヤカとの共同生活を自然に受け入れる言葉が出てくる自分にまず驚くが、夜中に彼女を家から放り出すような選択肢が浮かぶわけもなく、なし崩し的にこうなってしまう。

「ダメですよ、ご主人様。私はメイドなんです。ベッドはご主人様のものですよ？」

「で、でも……女性を床に寝かせるわけにはいかないよ」

緊張からベッドを向いたままそう言うと、急に背後からアヤカの手が伸びてきて、俺の身体をそっと抱いた。

柔らかい感触がむにゅっと背中当たって、俺は息を止める。

「それならば……一緒に寝るといっはいかですか？　ご主人様……」

いやに艶っぽい声色で、アヤカはそんなことを言う。

「この部屋……ご主人様の匂いがたっぷりします。女性の身体を求めて、いつも寂しい想いをしてお眠りになられているんですね。だから今日から……私がご主人様を慰めてあげますよ……？」

アヤカの手が、俺の胸板をさわさわと撫でてきた。
否応なしに、俺の股間がピクリと反応してしまう。

「な、慰めるって、どういう……?」

「ご主人様……分かりませんか……?」

するとアヤカは、耳元で熱っぽく囁いてくる。

「ご主人様の溜まった精液、私が、びゅーって気持ち良く出してあげますよ……? 私の口でも、胸でも……もっと気持ちのいい穴でも……私の身体で、ご主人様を癒してあげたいんです……」

生々しく想像してしまい、俺の思考は淫らに溶かされそうになる。

「……ど、どうして、俺にそこまで……? 誰かの、命令なのか……?」

「いいえ……これは、私の意志です。ご主人様を心からお慕いしているんです。だから」

ら……私の身体を……使っていただけませんか……？」

最後に堪えていた俺の理性は、何処か遠くに吹っ飛んでいってしまった。

ここ一週間は自慰をしておらず、性欲が溜まっているところに、この誘惑。耐えられるわけがない。

もう彼女の正体が何だって構わない。この性欲を、ようやく晴らすことができるのならば。

俺は決心して、ゆっくりと振り返る。

すると息を呑む暇もなく、頬を赤らめたアヤカが顔を近づけてきて、柔らかい唇を俺に合わせた。

人生初めてのキス。

「……ちゅっ」

アヤカは音を立てて唇を離し、はにかむようにフフツと笑った。

「ご主人様……隙だらけですよ……？」

「……そっちこそ」

俺はすっかりのぼせ上がった気分で、アヤカの湿った唇にキスをした。彼女は目を閉じて、俺に身を委ねる。

柔らかい唇を何度もこすり合わせていると、アヤカが自ら熱い舌を出してきて、俺の唇をぬるっと舐めた。

俺も舌を出して応じると、そのまま舌同士でキスをするように、互いの舌先を舐め合わせる行為になった。

舌同士の触れ合いは徐々に積極的になっていき、俺はアヤカの肩を抱いて、さらに深くキスをした。

「んんっ……ちゅっ……」

彼女が漏らす息が何とも興奮を高めてくる。

俺はアヤカの口内を丹念に舐めまわすように舌を動かすと、アヤカの長く柔らかい舌もそれを捉えて絡みついてきた。

舌の粘膜をぬるぬると擦り合わせる度に、熱がこもった二人の口内にとろりとした甘い唾液があふれてくる。

俺は固くそそり立ったペニスをズボン越しに彼女の股に強く押し当てながら、淫靡なディープキスに溺れていく。

アヤカもキスをされながら、下腹部をもじもじと動かして、俺の先端を焦らすように擦ってくる。

唇から唾液がこぼれ、お互いの口元まで濡れ始めるが、お構いなしに熱いキスをし

続けた。

「んむ……ちゅ……じゅるっ……」

アヤカは俺の唇に付いた唾液を時折りやらしく吸いながら、舌で深い接吻を何度もせがんでくる。

彼女の舌が俺の舌をねっとりねぶってきて、敏感な粘膜を擦り合わせる快楽に二人で酔いしれた。

彼女の身体を強く抱きしめると、俺の勃起した先が、スカート越しに彼女の敏感な場所を押した。

「んんっ……!!」

彼女がピクリと反応して、舌の動きが一瞬止まった。

その隙に俺は彼女の身体を抱いたまま向きを変え、ゆっくりとベッドに倒していく。

「はあっ……ご主人様……」

アヤカはうっとりした目で俺を見上げた。

彼女の唇には、透明な雫が滴っている。これは、俺と彼女の接吻が作った唾液だ。

俺は下腹部に熱がどんどん溜まっていくのを感じながら、アヤカの柔らかい身体にのしかかって、何度もついばむようにキスをした。

彼女は舌を盛んに絡めながら、自ら腕を俺の首に回して強く抱きついてきた。

ベッド本来の柔らかさも加わって、まるで身体がひとつに溶け合っていくようであった。身も心も彼女に温められ、癒されていく。

何度も下腹部を彼女に押しつけていく内に、服の中で湿り気を感じてくる。早く射精したいとペニスが我慢汁を走らせ始めたのだ。

「アヤカっ……」

キスを止め、俺は彼女の瞳を見つめた。

「……どうしました？ ご主人様……？」

きっと分かっているだろうに、アヤカはそう言っただけでとぼけた。

彼女の顔も紅潮しており、体温も高くなっている。呼吸と共に揺れ動く彼女の大きな胸には、汗が浮かび始めていた。

「あの……その……ちょっと……」

「分かりませんよ、ご主人様……？ 言ってください……？」

俺は観念して、ついに口走る。

「もう……出そうなんだ……」

「ふふ……初めてのご主人様の射精を、いただけるとはですね……」

アヤカは俺に軽くキスをしてから、甘ったるい声で問う。

「……ご主人様の精子……私のどこに、出したいですか……？ お顔に掛けますか……？
お口の中に出しますか……？ おっぱいに塗り込みたいですか……？ それとも……？」

俺は迫る限界を感じながら、最後に掛かった理性のブレーキで思い悩む。

一週間で溜まった精液だ。男としては、アヤカの最も大事な場所に放出したいという願望は強い。

だが、今の俺にコンドームなんて装備の用意はない。

煩悶する俺を察して、アヤカは言った。

「いいですよ……ご主人様が望むなら……私のナカに出しても……。全部、受け止めてあげますよ……？」

「でも、それは……」

「私も……ご主人様の初めての精液……お腹に欲しいです。子宮の奥まで……たっぷり愛してほしいんです……」

試読版は以上です。続きは本編で！

ガンスミス・アイヤマ

